

## 【冬の地貌季語の解説】

東日本 「かんずり」

かんずりの曝さらされている月光下

早乙女 翠

新潟県の豪雪地帯新井の産物に厳冬期の唐辛子を加工した『かんずり』がある。秋に収穫した唐辛子を寒中の雪に二、三日曝し、その後、米麴こめこうじ、塩、柚子ゆずなどの他、自然の香料を加え、三年間熟成させる。その間に発酵を繰り返し独特の香辛調味料になる。かんずりは商品名にもなっているが、ここでは雪に唐辛子を曝す。冬の越後の風物詩にふさわしい地貌季語として取り上げた。

掲句は、雪に曝された唐辛子に寒の月光が射している光景である。これ以上さむざむとした状況はないであろうが、雪中の唐辛子には雪国人の性根が、感じられ鋭い作になっている。

西日本 「虫供養」(むしくよう)

空港くうこうの築きずく灯ひが見え虫供養むしくよう

小牧 七草

知多半島北部の大野谷、阿久比谷、東浦に残っている念仏供養の伝統行事である。暮れの十五日から正月十五日にかけて行われる。冬の行事に虫供養の名称が面白い。愛知県の無形民俗文化財に指定される珍しいもの。

農地の少ない知多のお百姓にとり、害虫のうんか退治は欠かせないことであった。が、同時に殺生した虫の供養をし、西方浄土での成仏を願うことがこころの痛みを癒いやすすことにもなっていた。

掲句は、虫供養が行われる道場近くから、建設中の中部国際空港の灯が見えるという。空港建設と虫供養という、新旧の句材の対比が面白い。

出典：『語りかける季語 ゆるやかな日本』宮坂静生